

言語と文化

一言語学から読み解く
ことばのバリエーション

南 雅彦 著

A5判 368pp.
本体 3,000円
くろしお出版

言語と文化への尽きせぬ蘊蓄

本書は北米の大学で言語と文化について講義を担当し、現在もサンフランシスコ州立大学で教鞭をとる南氏による広い意味での社会言語学の入門書である。言語学の基本概念の説明と言語バリエーションの紹介があった後、普遍性と相対性、ポライトネス、地理的・社会的バリエーション、方言圏論、スピーチ・アコモデーション、社会階層や性差と言語、言語習得(獲得)、話し言葉と書き言葉といったテーマが扱われる。それぞれのテーマについては、単に先行研究を列挙し研究史上に位置づけるのではなく、主要な研究に絞って詳しく紹介されるので、個々のテーマをより具体的に理解することができる。例えば、言語と思考の関係に関する A. Bloom の研究と、それに続く T. K. Au の反論に関する部分(第2章)では、それぞれの研究で調査に使った課題が引用され、議論がわかりやすく整理されている。

読むにつれ、筆者の講義の様子が目に浮かぶような、いきいきとした文章が展開する。饒舌とさえ言っている。現代のテレビ番組や新聞記事からの興味深い例が引かれ、筆者が言語の優れた観察者であることをうかがわせる。例えば、

呼称の選択についての決定権は立場のより強い者が持つことを述べた第3章の3.1節では、三都主アレックスandroのAERAに載ったインタビュー、ドラマ『神はサイコロを振らない』の台詞、著者が大学院生だったとき受けたセミナーでの講師の発言、著者が授業を担当した学部の秘書の発言、著者が裕福な家庭の食事に招かれたときの体験、映画『オースティン・パワーズ』の台詞、高校野球アメリカ遠征チームに関する新聞記事、『SMAP×SMAP』での対談、ドラマ『弁護士のくず』の台詞が引用される。これに登場人物の紹介も加わるので、現象自体の説明がもの足りなく感じられるほどだ。また、Labovのマーサズ・ヴィニヤード島における社会言語調査を紹介する第5章1.1節は、隣のナンタケット島の紹介から始まり、『ジョーズ』の撮影地だったこと、エドワード・ケネディ上院議員の飲酒運転事故、クリントンやオバマが避暑に訪れたことが紹介されてから、Labovの研究の紹介となる。

現代の身近な実例が数多くあげられているので、最後まで興味を持ちつつ読み進むことができるだろう。ただし、例えば20年後の読者がこれらの例を今の私たちと同じように身近に感じて読めるのだろうかという疑問は残る。また、著者の軽妙な語りについていけない読者には、大量の例がかえって理解を妨げることになるかもしれない。

とはいえ、言語と文化を扱ったユニークで優れた入門書である。特に異文化コミュニケーション論のような授業を受講する学生には、よい参考書となるに違いない。

(東京大学教授 林 徹)